

# 柳 宗悦の民芸論（Ⅱ）

— 見ることから知ることへ —

八 田 善 穂

## I 朝鮮民族美術館

- (1) 李朝との出会い
- (2) 3・1運動
- (3) 朝鮮民族美術館

## II 木喰上人

- (1) 発見と調査
- (2) 民芸論への道
- (3) 宗教と芸術

## III 見ることと知ること

- (1) 直観について
- (2) 民芸学の理念

「読者は恐らく宗教哲学を専攻する私から、此のやうな題目を得ようとは、よもや予期しなかつたであらう。併し私は永らく此の題材を愛してゐた。私は之によって貴方がたの前に、一つの親しい美の世界を提供し得ると考へてゐる。又之によって美の神秘に如何にして近づくべきかと云ふことをも告げ得るかと思つてゐる。陶磁器が含む美に就て、私の考へや感情を述べることは、強ち私にとつて不適當なことではなからうと思ふ。」

これは大正11年、「新潮」1月号に載つた柳宗悦<sup>1)</sup>の「陶磁器の美<sup>2)</sup>」と題

---

注1) 1889(明治22) - 1961(昭和36)

2) 筑摩書房版全集第12巻「陶磁器の美」、春秋社版選集第6巻「茶と美」所収。なお、発表年次について、全集本では大正10年となっている。

する論文の冒頭・である。この論文は彼が工芸について述べた最初のものであった。続いて大正15年には「下手ものの美<sup>4)</sup>」が発表される。

本稿は、柳がこの時期に重ねた思索と活動の中に、後の彼の民芸論（仏教美学）の萌芽を探ろうとするものである。またこれと併せて、40年にわたる彼の民芸に関する思索の前半期の特長をとらえることとする<sup>5)</sup>。

## I 朝鮮民族美術館

### (1) 李朝との出会い

柳は「陶磁器の美」を発表する以前に、『キリアム・ブレイク』（大正3年）、『宗教とその真理』（大正8年）、『宗教的奇跡』（大正10年）、『ブレイクの言葉』（同）等の著作を発表しており、当時は東洋大学哲学科教授（大正8年—大正12年）、明治大学予科倫理学・英文学講師（大正10年—大正13年）を勤めていた。

東京帝大哲学科を卒業（大正2年）の後、柳はしばらく英国の詩人・画家ウィリアム・ブレイク<sup>6)</sup>の研究に打ち込む。当時はまだ、英国においてすら、この神秘詩人はあまり評価されることがなかった。770ページにおよぶ柳の『キリアム・ブレイク』は、日本のブレイク研究史上重要なものである。

柳はまた、「白樺」（明治43年—大正12年）の創刊以来のメンバーであり、同誌に多くの論文を発表している。それらの中には宗教に関するものの他に、西洋美術（ビアズレー<sup>7)</sup>、ルノアール<sup>8)</sup>等）に関するもの、英米文学（ブレイク、ホイットマン<sup>9)</sup>、エマソン<sup>10)</sup>等）に関するものがある。しかし陶磁器に関するものは「陶磁器の美」が最初である。柳自身がいう通り、この論文はそれ

3) 春秋社版選集第6巻「茶と美」（昭和47年）p.330

4) 「越後タイムス」大正15年9月19日

5) 柳の著作は旧字体（正字体）、旧かなづかいによっているが、本稿では印刷の都合上、漢字のみ当用漢字に改めた。

6) William Blake (1757—1827)

7) 英国の画家, Aubrey Beardsley (1872—1898)

8) フランスの画家, Auguste Renoir (1841—1919)

9) 米国の詩人, Walt Whitman (1819—1892)

10) 米国の思想家, Ralph W. Emerson (1803—1882)

までの柳を知る人々に意外な印象を与えたにちがいない。

しかし、これも柳の言葉にある通り、柳はこのとき急に陶磁器に対する関心をもったのではない。早くには英国の陶芸家バーナード・リーチ<sup>11)</sup>との出会い（明治42年）がある。幼年期を日本で過したことがあるリーチはこの年に再び日本を訪れ、大正9年まで11年間日本に滞在（大正4年から翌年にかけては北京に滞在）する。柳にブレイクのことを教えたのはリーチであった。

柳が浜田庄司<sup>12)</sup>を識ったのは大正8年、リーチを通じてであり、河井寛次郎<sup>13)</sup>を識ったのは大正13年、浜田を通じてであった。大正15年に発表された「日本民芸美術館設立趣意書<sup>14)</sup>」の本文（「趣旨」）署名者は、柳、河井、浜田、富本憲吉<sup>15)</sup>の4人であることだけを見ても、民芸運動の開始に先立って、リーチが柳に与えた影響は大きいといえる。リーチと柳は終生の友であった。

この他に、柳に陶磁器への眼をひらかせたできごととして、大正5年の朝鮮・中国旅行がある。この年<sup>16)</sup>、浅川伯教<sup>17)</sup>が柳を訪れた。当時朝鮮で小学校の教師をしていた浅川は、朝鮮の美術工芸に対する関心が深く、柳を訪れる際に李朝の壺を土産に持参した。この壺を見たことが、柳の李朝のやきものとの出会いであったといわれている。同年の夏、柳ははじめて朝鮮と中国へ旅行をし、朝鮮で浅川伯教の弟浅川巧<sup>18)</sup>を識った。朝鮮総督府林業試験場に勤める巧も、兄伯教と同様に朝鮮の美術工芸に強い関心を抱いていた。この後柳は数回にわたり朝鮮を訪れることになる。

## （2）3・1運動

大正8年3月1日、京城（ソウル）で朝鮮民族の独立運動が起った。3・1

---

11) Bernard Leach (1887—1979)

12) 陶芸家, 1894 (明治27) — 1978 (昭和53)

13) 陶芸家, 1890 (明治23) — 1966 (昭和41)

14) 『雑器の美』工政会出版部 (昭和2年) 筑摩書房版全集第16巻「日本民芸館」, 講談社刊日本民俗文化大系6「柳宗悦」(昭和53年)などに収録。

15) 陶芸家, 1886 (明治19) — 1963 (昭和38)

16) 大正3年とする説もある。

17) 1884 (明治17) — 1964 (昭和39)

18) 1891 (明治24) — 1931 (昭和6)

独立運動（万歳事件）である。運動はただちに各地にひろまり、200万人以上が参加したという。日本側はこれに対して武力鎮圧を強行し、虐殺事件をもひき起した。

しかしこの運動は当時の日本人にそれほどの影響を与えず、多くの知識人は沈黙を守ったままであった。その中で、柳は朝鮮人を擁護する立場で発言をしたごくまれな1人であった。

同年5月、柳は読売新聞に「朝鮮人を想ふ<sup>19)</sup>」という文章を載せた。その中で彼はいう。

「吾々は先づ永遠の独立を彼等に不可能ならしめる固定した方法をとった。更に尚自律する彼等の精神を認めない事によって、只日本に適する道徳と教育とを与へた。一言でいへば物質に於ても靈に於ても彼等の自由と独立とを奪った。かくて人は日本の思想を植ゑようとするが彼等の心を活かさうとは試みてゐない。彼等に接する時、与へるのは刃であって愛ではなかった。吾々は費用と主権者とを与へて彼等の自由と交換させた。彼等は生命と財産との保証を得る事によって、愛を永へに見かざる悲しみを嘗めた。<sup>20)</sup>」

彼は京成で朝鮮人の高等女学校を参観し、そこで生徒の刺繍の作品を見た。それらの中の大作は朝鮮固有の美をもたぬ現代日本風のものであり、しかも、教師はそれを優れた作品とした。そのとき柳は、「かかる教育を強いられて固有の美を失ってゆく朝鮮の損失を淋しく思った<sup>21)</sup>」という。

「之が所謂同化の道であるなら、それは恐るべき同化である。私は世界芸術に立派な位置を占める朝鮮の名誉を保留するのが、日本の行ふべき正当な人道であると思ふ。教育は彼らを活かすための教育であって、殺すための教育であってはならぬ。<sup>22)</sup>」

「朝鮮の人々よ、よし私の国の識者の凡てが御身等を罵り又御身等を苦しめ

---

19) 筑摩書房版全集第6巻「朝鮮とその藝術」、春秋社版選集第4巻「朝鮮とその芸術」、筑摩書房刊近代日本思想大系24「柳宗悦集」（昭和50年）などに収録。

20) 春秋社版選集第4巻「朝鮮とその芸術」（昭和47年）p.10

21) 同書、p.12

22) 同書、pp.12-13

る事があっても、彼等の中にこの一文を草した者のゐる事を知ってほしい。否、私のみならず、私の愛する凡ての知友は同じ愛情を御身等に感じてゐる事を知ってほしい。かくて吾々の国が正しい人道を踏んでゐないといふ明らかな反省が吾々の間にある事を知ってほしい。<sup>23)</sup>」

彼は朝鮮の人々に対する信頼と情愛を示すべく、翌大正9年、声楽家の兼子夫人<sup>24)</sup>と共に朝鮮へ渡った。兼子夫人のリサイタルは、困難の中で開かれながらも、成功であったという。

この旅行に先立ち、柳は「朝鮮の友に贈る書<sup>25)</sup>」を書き、次のように述べた（この論文が実際に発表されたのは帰国後であった）。

「私は今二つの国にある不自然な関係が正される日の来ることを切に希ってゐる。正に日本にとっての兄弟である朝鮮は日本の奴隷であってはならぬ。それは朝鮮の不名誉であるよりも、日本にとって恥辱の恥辱である。<sup>26)</sup>」

「私はそれが私自身の行ひでないとはいへ、少くとも或場合日本が不正であったと思ふ時、日本に生れた一人として、茲に私はその罪を貴方がたに謝したく思ふ。私はひそかに神に向つてその罪の許しを乞はないではゐられない。<sup>27)</sup>」

大正11年、柳はこれらの文章を含めて『朝鮮とその芸術<sup>28)</sup>』を出版した。

またこの時期、彼は総督府庁舎の建設に伴つて朝鮮の建築物（光化門）が破壊されることになったことに反対し、「失はれんとする一朝鮮建築のために<sup>29)</sup>」という文章を発表した。この文章は世論を呼び起すこととなり、門は破壊をまぬがれて移築された。その後、朝鮮戦争の爆撃で焼失し、現在は当初の位置に復元されている。

---

23) 同書, p.17

24) 1892（明治25）—1984（昭和59）

25) 大正9年「改造」6月号所載,注19)参照。

26) 春秋社版選集第4巻「朝鮮とその芸術」pp.27—28

27) 同書, pp.22—23

28) 叢文閣刊

29) 大正11年「改造」9月号所載,注19)参照。

## (3) 朝鮮民族美術館

大正9年、柳は上述の思想の一環として「朝鮮民族美術館」の設立構想を立て、翌年の1月に計画を発表した。そして5月に東京で「朝鮮民族美術展覧会」を開いた後、大正13年に京城景福宮緝敬堂しゅうに「朝鮮民族美術館」を開設した。この資金調達のために、柳夫妻は大正10年に渡鮮し、講演会・音楽会を開いている。柳は大正10年「白樺」に発表した「朝鮮民族美術館」の設立に就て<sup>30)</sup>という文章のなかで、次のように述べている。

「私は先づここに民族芸術Folk Artとしての朝鮮の味ひのにじみ出た作品を蒐集しようと思ふ。如何なる意味に於ても、私はこの美術館に於て、人々に朝鮮の美を伝えたい。さうしてそこに現はれる民族の人情を目前に呼び起したい。そのみならず、私は之が消えようとする民族芸術の、消えない持続と新たな復活との動因になる事を希ふ。数の少ない朝鮮の作品は、恐らくあと十年の後には散逸の悲みを見るであらう。今朝鮮の人々は目前の出来事の為に、それ等のものを顧る余裕を持たない。然し今のままでおけば、いつかそれ等の作品に対する悲しい追憶が来るにちがひない。私はその不幸な散逸を防止する為にも、かかる企てが為されねばならぬ仕事であると思ふ。之を急がないならばだ管に機は失はれるのみならず、民族の固有の美すら、遂に過去のものとして葬られるにちがひない。

私は種々考へた末その美術館を、東京ではなく京城の地に建てようと思ふ。特にその民族とその自然とに、密接な関係を持つ朝鮮の作品は、永く朝鮮の人々の間に置かれねばならぬと思ふ。その地に生れ出たものは、その地に帰るのが自然であらう。<sup>31)</sup>」

「欧米の物質文明の移入の為に、東洋の貴重な手芸Handicraftは、漸次いん湮滅の悲運を見ようとする。私は此美術館が管に過去の美しい記憶を人々に贈るの

30) 筑摩書房版全集第6巻「朝鮮とその芸術」、講談社刊日本民俗文化大系6「柳宗悦」（昭和53年）所収。

31) 講談社刊日本民俗文化大系6「柳宗悦」、p.247

みならず、新たな作品に対する刺激をその民族に呼び起す機関になる事を希ってゐる。

然も亦、私の望む所は、この美術館をあの冷かな味のない陳列館の如きものにするのではない。私は充分な顧慮によって、その室や排置や、光や位置にも、朝鮮の美を欠かない様にしようと思ふ。人々がそこに見んが為に行くのではなく、親しむ為に行く様にしたい。それ故私はその美術館が、日鮮の人々の親しく会し、心おきなく語り合ふ場所にもしたいと思ふ。吾々は今迄殆どさう云ふ会合の場所を持たない。然し芸術と云ふ普遍的な国に入るならば、吾々は必ずやよき心の友であるにちがひない。私はこの美術館がかかる親しい交りのよい機関であることを欲する。朝鮮の地を踏む人々は此美術館を訪ねるのを忘れてはいけない。<sup>32)</sup>」

水尾比呂志氏は次のようにいう。

「柳氏は……朝鮮において蒐集した李朝の品々を、京城景福宮内の一室に「朝鮮民族美術館」を設けて展示した。偏見に捉われた日本の鑑賞家たちの嘲笑は、氏にとっては却って幸いであった。李朝磁器は美術品としての市価が定まっておらず、佳品は続々と柳氏の手許に集まったからだ。しかるにそれ以後、この焼物に対する認識は日増しに高まって、現在では驚くべき価格を呼び、もはや容易に手に入れることは不可能となっている。世は柳氏の発見を認めたのである。<sup>33)</sup>」

柳は「美術館」の開設に先立ち、大正11年に京城貴族会館で「李朝陶磁器展」を開き、大成功を収めている。

この「美術館」の開設に当り、終始柳を助けたのが前述の浅川兄弟であった。柳は弟巧の著書『朝鮮の膳<sup>34)</sup>』の跋文<sup>35)</sup>の中でいう。

「挿絵に入れた膳の大部分は実に君と僕とが「朝鮮民族美術館」のために集

---

32) 同書、p.248

33) 水尾比呂志『東洋の美学』美術出版社、昭和38年 p.120

34) 工政会出版部、昭和4年刊。復刻版『浅川巧著作集』八潮書店、昭和53年。この復刻版には柳の跋文は載っていない。

35) 筑摩書房版全集第6巻「朝鮮とその藝術」、春秋社版私版本柳宗悦集第6巻「私の念願」所収。

めたものだった。なけなしの金でお互に困りながらも、是等のものを保存したいばかりに力を協せてきたのだ。否、君の理解と情愛と努力とが無かったら、何も成就しはしなかったのだ。僕は内地にゐることとて、凡ての厄介なことを君に負ってもらったのだ。将来蒐集されたそれ等の工芸品を見て悦んでくれる人が出るなら、何事よりも君の努力に感謝していいのだ。或ものは古道具屋の暗い片隅から、君の眼によって引きぬかれてきたのだ。或ものは山奥の民家から、君の背に負はれてはるばる運ばれて来たのだ。或ものは生活に要る金を忘れてまで支払はれた品なのだ。謂はば君が生みの親だ。<sup>36)</sup>

この美術館は、朝鮮戦争後なくなってしまったようであるが、後の彼の活動の方向を示す原点ともいうべきものである。

## II 木喰上人

### (1) 発見と調査

朝鮮民族美術館開館の直前、大正13年の1月に、柳は浅川巧と共に甲州の小宮山清三宅へ朝鮮の陶磁器を見に行き、そこで偶然木喰仏を発見した。これは一つの「事件」であった。柳によれば次の通りである。

「小宮山氏とは初対面でした。然るにその日偶然にも二躰の上人の作が私の目に映ったのです。目に映ったといふ方が応はしいでせう。私の求めによって主人が私に示さうとされたのも焼物であって、それ等の彫刻ではなかったのです。二躰の仏像は暗い庫の前に置かれてありました。(それは地蔵菩薩と無量寿如来とでした)。さうしてその前を通った時、私の視線は思はずそれ等のものに触れたのです。(その折若し仏躰に薄い一枚の布が掛っていたとしたら、一生上人は私から匿されてゐたかもしれないのです)。私は即座に心を奪はれました。その口許に漂ふ微笑は私を限りなく惹きつけました。尋常な作者ではない。異数な宗教的体験がなくば、かかるものは刻み得ない——私の直覚は

---

36) 春秋社私版柳宗悦集第6巻「私の念願」(昭和53年) p.297

1984年12月 八田善穂：柳 宗悦の民芸論（Ⅱ）

さう断定せざるを得ませんでした。座敷に通された時更に一躰、南無大師の像が安置してありました。その折私は始めて小宮山氏から「木喰上人」という名を聞かされました。<sup>37)</sup>」

このときから、柳の精力的な木喰研究が始まる。

この前年、柳は東洋大学教授を辞任し、秋には関東大震災の被害に遭っている。13年続いた「白樺」は震災を機に終刊する。そして大正13年、柳は明治大学講師、女子英学塾（現津田塾大学）倫理学教授を辞任し、4月に「朝鮮民族美術館」を開館した後京都に移り、同志社女子専門学校教授となった。またこの年には、大正9年からリーチと共に英国へ渡っていた浜田が、震災の報により、急遽帰国した。このことが、柳と河井が識りあうきっかけとなる。

「広辞苑」で「木食・木喰」の項をひくと、次のように出ている。

①木食<sup>おうち</sup>応其。室町末期の真言宗の僧。字は順良。近江の人。もと武士。高野山で出家し、木食して修行。豊臣秀吉の帰依を受けて、高野山金堂・興山寺を建立再興。連歌をよくした。（1536—1608）

②木食<sup>ごきよう</sup>五行。江戸後期の遊行僧。俗姓、伊藤。甲斐の人。千体仏造像を発願して各地を遍歴、日本全土に特異な木彫仏を残す。（1718—1810）

柳が見たのは後者の仏像である。木食とは、「米穀を断ち、木の実を食べて修行すること」（「広辞苑」）であり、「そのような僧を木食<sup>しうじん</sup>上人と呼ぶ。」（同）

柳が甲州で木喰仏を見た当時、木喰五行上人（通例「喰」の字を用いる）については何も知られていなかった。はじめ柳はさまざまな文献を調べた。しかし手がかりはまったく得られなかった。小宮山の協力により、わずかに知られたことは、「上人の故郷が峡南の丸畑といふ村であること、幾十の仏躰を一緒に刻んで堂に納めたこと、その堂が尚丸畑に残るらしきこと、寛政頃にくた人であったこと<sup>38)</sup>」であった。丸畑は現在の山梨県西八代郡下部町古関丸畑であ

---

37) 「木喰上人発見の縁起」筑摩書房版全集第7巻「木喰五行上人」、春秋社版選集第9巻「木喰上人」、春秋社版私版本柳宗悦集第4巻「蒐集物語」、筑摩書房刊近代日本思想大系24「柳宗悦集」（昭和50年）所収。春秋社版選集第9巻「木喰上人」（昭和47年）p.5

38) 同書，p.7

る。

同年6月、柳は丸畑を訪れた。そこで彼は数体の仏像の他に、上人自筆の若干の文書を見ることができた。この偶然ともいふべきできごとが、すべてのはじまりであった。文書のなかには、「自叙伝とも見るべきものや、旅行記ともいふべきものや、又教理を説いたものや、又折にふれ綴った和歌等が含まれてゐた<sup>39)</sup>」。柳はいう。

「残してある二冊の『御宿帳』を見ますと、それには日々の日附と地名と宿りし家を隅なく記してはありますが、その中に日附のとんでゐる個所があり、又「何日より何日迄」と滞在の日を数えてゐる場合があり、又「何日立つ」と短く記してある個所があるのです。私は是によって日附のない期間を滞留期と見做し、その期間の長い場所には、必ずや遺作がなければならぬと判断したのです。私は先づ主な個所を選び、次々にそれ等の地に調査を企てたのです。私が佐渡に渡ったのも、遠州の寒村狩宿<sup>40)</sup>を訪ねたのも、又は日向の国や長州の村々を調査したのも、皆この予想のもとに試みたのです。調査は屢々困難でした。なぜならそれは多く名も知れぬ片田舎にあるからです。且つ殆どどの土地でも上人の名を覚えてゐないからです。まして上人の作を大切に保存してゐる寺はごく稀にしかないからです。……併し凡ての調査はあり余る酬いを以て迎へられました。寧ろ行くところ見当らざるなき有様でした。私は鼓舞せられ東へ又は西へ足跡を追って発見に努めました。私はそれ等の仏の殆ど凡てを、うづ高き塵の下から取り出しました。

僅か数個の字に過ぎなくとも、記録の有難さをしみじみ感じました。若し『御宿帳』が残ってゐなかつたら、上人の遺作は忘れられたまま、遂に朽果てたものが多いでせう。なぜなら誰もその広汎な分布区域に就いて知ることは出来ないからです。まして僻陬<sup>へきそう</sup>の地にあるそれ等のものを見出すことは殆ど望み難いからです。それに大部分はつまらなき作として物置のやうな所に放置せられ、守る僧もなく虫の喰むに任せてあるからです。もう五年十年の後であっ

39) 同書, p.14

40) 引佐郡引佐町狩宿

たら、如何に多くその数は減じてゐるでせう。私並びに私の友は実によい時期に上人の招きを受けたのです。貴重な文字は次ぎ次ぎに匿れた謎を解いてくれました。<sup>41)</sup>」

大正13年、雑誌「女性」7月号に「木喰上人に就いて」、「上人作地藏尊に寄す」が載り、9月号から翌年3月号にかけて「木喰上人研究」が連載された。また大正13年秋には小宮山により「木喰五行上人研究会」が発足、翌年3月には同会より雑誌『木喰上人之研究』が発刊された（1～5号）。さらに同年（大正14年）には同会より『木喰上人之研究』（雑誌特別号）、『木喰上人作木彫仏』（図録）、『木喰上人略伝』が刊行され、翌大正15年には『木喰上人和歌選集』が出版されている。わずか2～3年の間に、集中的な研究がなされたことがわかる。当時柳自身によって発見された仏像は約350体に上るといふ（昭和30年には500体に及んでいる）。

木喰は22歳で僧となり、45歳で木喰戒を受けた。56歳のとき日本廻国の大願を発し、以後93歳で示寂するまで、全国各地をめぐり歩いた。仏像を彫りはじめたのは61歳、北海道へ行った頃からという。晩年の作には「日本千タイノ内」と記されており、最晩年の作には「二千躰の内」とあることから、1,000体以上の仏像を刻んだことが知られる。しかし柳の目にふれるまで、誰も木喰仏に注意を払うものはいなかった。近年の木喰ブームを見ると、柳の目の確かさがわかる。

## （2）民芸論への道

雑誌「木喰上人之研究」刊行の実務を担当したのは式場隆三郎<sup>42)</sup>である。式場は新潟医専に在学中の頃から「白樺」の愛読者であった。昭和14年からは「月刊民芸」（昭和17年からは「民芸」と改称、昭和19年終刊）を主催している。式場はいう。

「この木喰研究は、柳先生の生涯に大きな転機をつくった。そして民芸運動

---

41) 春秋社版選集第9巻「木喰上人」pp.15-17

42) 精神科医、1898（明治31）-1965（昭和40）

は、この中から生れたのである、いま木喰研究誌を精読する人は、その中に民芸論の前駆をなす思考の数々を発見するであらう。

北は北海道から南は九州に亙る九十三年の上人の足跡は、百年後に柳先生によって再び巡歴された。その旅は名もない田舎の寺々を訪ねることが多かった。李朝陶磁器の研究に新しい道を拓かれた柳先生は、さうした寺々や村や町にある仏具の中から、日用雑器の中から数々の民芸品の美を発見された。<sup>43)</sup>

「木喰仏発見の喜びは、副産物としてかうしたものの発見で二重に大きかった。柳先生の民芸論の根柢は、かうした事実根ざしたのであった。<sup>44)</sup>

「今でも柳先生の仕事を認めながら、木喰研究だけは失敗のやうにいふ人がある。しかし……木喰研究が決して柳先生の一失でなく、今日の民芸運動の母胎となったことを主張したい……。

木喰さんのことで柳先生と離れた人も多かったかもしれぬ。しかし、木喰さんで結ばれた人がいかに多かったかも忘れてはならない。河井さん<sup>45)</sup>にしても、寿岳兄<sup>46)</sup>にしても、今日の親交は木喰さんによる結縁なのである。京都時代<sup>47)</sup>の柳先生の活動は、河井さんのやうなよき友がゐたことも大きな力であった。<sup>48)</sup>

「作風は一見異様であり、仏像としての形式や約束を無視してはゐるが、みてゐる中にそれがいかに自然であり、親しみ深いものであるかがわかる。これほど深く民衆の生活に交はることができる仏像はあるまい。みてゐて微笑ましくなる。<sup>49)</sup>

「木喰仏は専門家の批判を求める必要はない。木喰さんはいつまでも民衆のものであってよいのだ。われわれは民芸の本尊として木喰仏を拝みたい。民芸のわかる人なら、木喰さんの真髓はわかる筈だ。さういふ同志の守護仏として、

---

43) 式場隆三郎『諸国の民芸』大日本雄弁会講談社、昭和22年 p.164

44) 同書、p.165

45) 河井寛次郎、注13) 参照。

46) 寿岳文章(英文学者)、1900(明治33) —

47) 大正13年—昭和8年

48) 式場前掲書、pp.165—166

49) 同書、p.168

木喰さんを敬愛したい。<sup>50)</sup>」

柳自身も次のようにいう。

「私は民衆的な作品に、近頃いたく心を惹かれてゐました。日常の実用品として製作されたもの、何等の美の理論なくして無心に作られたもの、貧しい農家や片田舎の工場から生れたもの、一言で云へば極めて地方的な郷土的な民間的なもの、自然の中から湧き上る作為なき製品に、真の美があり法則があると、いふことに留意して来ました。（目下私は余暇を見ては焼物中の「民窯」とも称すべき所謂「下手物」<sup>げてももの</sup>を蒐集し、不日その展覧会と研究とを発表する計画でゐます。之によって隠れた驚くべき美の世界を提出し得ると信じてゐるのです）。かかる私にとって、彫刻に於て民衆の特色の著しい上人の作が、異常な魅力を以て迫ったのはいふまでもありません。<sup>51)</sup>」

ここには彼の民芸論がすでにかなり明瞭にあらわれている。この文章が書かれたのは大正14年である。そしてこの年の暮から翌年にかけて、柳と浜田、河井の3人は木喰仏を訪ねて紀州を旅行し、その途中で「民芸」の語が造られた。このことを考えると、木喰仏の発見と調査は、いわば偶然のできごととはいえ、柳の民芸論の形成にとって、かなり重要な意味をもつものといえよう。

### （3）宗教と芸術

ここでもう1つ考えておくべきことがある。それは、柳が後に「仏教美学」と呼んだ彼の独自の美論の形成に対して、木喰仏の発見がどの程度に影響したかということである。彼はいう。

「私の専攻する学問は宗教の領域に関するものです。私の注意は究竟の世界に最も強く惹かれてゐるのです。（貧しい乍らも私の二、三の宗教著書は、この世界を追ひ求めてきた是までの生活を語ってくれるでせう）。さうして私が求めた宗教的本質が、上人の作に活々と具体化されてゐるのを目前に見たのです。私の心は動かないわけにゆきませんでした。特に芸術と宗教とが深く編み

---

50) 同上

51) 「木喰上人発見の縁起」春秋社版選集第9巻「木喰上人」pp.2-3

なされてゐる世界に、強く心を誘はれてゐる私は、それ等の要素の完全な結合である上人の作に、自から近づくべき歩を進めてゐたのです。<sup>52)</sup>」

「嘗ては仏僧と仏師とは一体であった。信念もなく仏に刀を下す非礼は近代での出来事である。信仰と技術とは分離せられた。僧侶たることと彫刻家たることとは区画せられた。信仰は美なくして語られ、美は信仰なくして表現せられた、分業に傷つくこの末世に於て、私達は仏僧と仏師とを兼ね備へた上人を見出すのである。彼の作が如何なる位置を近代で占めるかは明確な事象ではないか。私達は何故推古の時代や、中世の時代に驚くべき宗教芸術があるかを知つてゐる。それを偉大ならしめてゐる同じ法則が、上人の遺作を保証してゐると私は考へるのである。私はそれ等のものを玄人の作とか素人の作とか分けることが出来ぬ。宗教芸術に「なくてはならぬ一つのもの」が、その美を守護してゐるのである。<sup>53)</sup>」

昭和35年に発表された「美の浄土<sup>54)</sup>」においても柳は、「各々のものが違つたままで、各々が凡て美しさに受け取られる」、「醜いままでそれが活かされて、美しさと交はつて了ふ」例として、木喰仏を挙げている<sup>55)</sup>。

これに対して、熊倉功夫氏は次のように指摘する。

「しかし、木喰上人の彫刻のなかに信仰の美をみた柳の眼はまだ不徹底なものであった。なぜなら、その信仰の美は木喰上人の信仰のなせるわざである。いわば宗教にめざめた人々の信仰なのである。その人が信仰の力をまけて彫刻に、あるいは和歌に偉大な美を表現したというなら、それはウィリアム・ブレイクの評伝のなかですでに指摘している。宗教と芸術は相対的な関係でしかあり得ない。柳がこの相対の壁をつきやぶつて、信仰と民衆の美を一体としてとらえるようになるには、民芸の思想の発見にまたねばならなかつた。

すなわち、柳は木喰上人の研究をとおして、「信仰が生み出す美」について

---

52) 同書, p.3

53) 「故郷丸畑に於ける上人の彫刻」,同書, p.239

54) 筑摩書房版全集第18巻「美の法門」,春秋社私版本柳宗悦集第1巻「美の法門」所収。

55) 春秋社私版本柳宗悦集第1巻「美の法門」(昭和48年)p.231

語ったのであるが、信仰としての自覚すらない「信の美」について未だ十分に述べるに至っていない。「信の美」は真の他力道において実現されるのであり、そのことに柳の目をひらかせたのは陶磁器の美であった。民芸の門に、ただ触れさえすれば開かれるところまで近づいた。しかし、ついに「民芸」の語は朝鮮の芸術のなかにも、木喰上人研究のなかにも、まだ登場しなかったのである。<sup>56)</sup>

たしかに、はっきりとした形で、後の「仏教美学」につながるような考えが、すでにこの時期にあったわけではなさそうである。しかし、その兆しに近いものならば、大正11年の「陶磁器の美」の中にいくつか見出すことができる。すなわち、

「何が故に宋窯はしかく貴い気品と深い美とを示すのであるか。私は其の美がいつも「一」としての世界を示してゐるが故であらうと思ふ。「一」とはあの温かい思索者であったプロティヌス<sup>57)</sup>も解したやうに、美の相ではないか。私は宋窯に於て裂かれた二元の対峙を見る場合がない。そこにはいつも強さと柔かさとの結合がある。動と静との交わりがある。あの唐宋の時代に於て深く味はれた「中観<sup>58)</sup>」や「円融<sup>59)</sup>」や「相即<sup>60)</sup>」の究竟な仏教思想が、そのままに示し出されてゐる。未だ二を発しない「中庸」の性が、その美にあるではないか。之は私の空想ではない。試みにその器を手にして見よう。そこには実に磁と陶との交わりがあるではないか。それは石に傾くのではなく土に偏するのでもない。二つの極がここに交はってゐる。二にして不二である。甞に之のみではない。焼き尽さず焼き残らぬ不二の境に、その器は美を委ねてゐるではないか。<sup>61)</sup>

---

56) 熊倉功夫『民芸の発見』（季刊論叢日本文化10,角川書店,昭和53年),pp.68-69

57) Plotinos (204-269) 新プラトン派の代表者。エジプトに生まれローマで神秘主義的汎神論哲学を講じた。

58) 現実を有と無の二辺に偏らず、正しく観察すること。(広辞苑)

59) 迷いの立場から見ると区別があるように考えられるさまざまな存在も、真実としては区別なく、絶対的同一であること。(同)

60) 相互に融合しあい一体となっていること。(同)

61) 春秋社版選集第6巻「茶と美」pp.356-357

「私は「一」としての美をそこに想はない時はない。それは円相を示してゐるのではないか。中観の美があるのではないか。かかる性質が宋窯を永遠ならしめてゐると私はいつも想ふ。<sup>62)</sup>」

「静かなそれ等の器は、屢々真理の国にさへ私を導いて行ってくれた。私は美が何ものを意味し、心が何事を成し遂げ、自然が如何なる秘義を包むかをも顧みることが出来た。私にとっては器にも信仰の現はれがあり、哲理の深さがあった。<sup>63)</sup>」

熊倉氏はこの論文についてはふれていない。しかし氏の言葉にある通り、陶磁器の美についての思索は、柳の思想形成に当って重要な要素であった。そこで、陶磁器の美について最初に書かれたこの論文の中に、後に展開される美論（仏教美学）の萌芽ともいべきものが見出されることは、むしろ至当というべきであろう。

### Ⅲ 見ることと知ること

#### (1) 直観について

木喰に関する文献の中で、五来重氏の『微笑佛<sup>64)</sup>』は柳に対してかなり批判的である。五来氏はいふ。

「大正末年の木喰ブームは柳宗悦の民芸運動から出発した。柳宗悦は学習院から東大にいたる貴族秀才コースのなかで、武者小路<sup>65)</sup>、志賀<sup>66)</sup>、里見<sup>67)</sup>、有島<sup>68)</sup>等とともに、草創期白樺派の高踏的な文芸運動にくわりながら、一方では名もなき庶民の手になる民芸品や雑器の美をたかく評価した。彼はこれをブレイクの神秘主義思想や、美の直観的認識でもっともらしく説明するのだが、

62) 同書, p.357

63) 同書, p.372

64) 五来重『微笑佛』淡交新社,昭和41年。

65) 武者小路実篤(1885—1976)

66) 志賀直哉(1883—1971)

67) 里見 弴(1888—1982)

68) 有島武郎(1878—1923)

とくに庶民がすきだというわけではなく、ありようは、明治末期・大正期の文化人に一貫したディレクタントイズム精神の反骨的なあらわれにすぎなかった。私は柳宗悦の宗教論や人生論、芸術論にながれるディレクタントイズムにはいささかうんざりするが、彼の民芸品の発見と蒐集は、日本の文化史にのこる偉大な業績として敬意を表する。日本民芸館はその偉大なモニュメントであるとともに、彼の属した階級の高踏性もよくのこしている。

柳宗悦の木喰研究とはそのようなディレクタントイズムの所産であるだけに、いつも理窟と理論がさきに立つのである。宗教とは、美とは、かくかくのものであるという理論を自分一人で作ってあげておいて、これに民芸も親鸞<sup>69)</sup>も一遍<sup>70)</sup>も木喰もあてはめてゆくやり方である。だからその所論はきわめて主観的（彼はこの主観の正しさをほこったのだが）で客観性にとぼしく、歴史事実などはまったく無視されてしまう。その点から今後の木喰研究は柳宗悦をこえて、歴史的研究をくわえた、客観性をもったものにならなければなるまい。<sup>71)</sup>

「柳宗悦は宗教と芸術を一体とする、中世的神秘主義に立った美学の理念に木喰をはめこんで、一人角力のように木喰仏を絶讃するのである。

柳宗悦の時代はまた木喰仏の大発見時代である。柳宗悦は大正十二年<sup>72)</sup>に甲府で最初の一体を発見し、それから全国的調査で三百数十体を発見する。しかし彼は一体を発見するごとに、その美に酔ったというよりも、発見のよろこびに酔ったのである。正直に言って古典的美学の立場から、これはたしかに仏像彫刻として傑作だとおもわれる木喰仏も少数は存在する。しかし全部が全部、柳宗悦のいったように、「幕末時代最高の傑作」などといえるものではないだろう。柳宗悦はむしろ木喰仏をかりて自分の美的直観力の優越をほこり、自分の美学をかたりたかったのである。貴族的優越感と、ディレクタントイズムと、発見のよろこびとがごっちゃになって、べたほめの木喰礼讃がとびだしたものと、私は解釈している。

---

69) 1173—1262, 浄土真宗の開祖。

70) 1239—1289, 時宗の開祖。

71) 五米前掲書, pp.20—21

72) 大正13年の誤り。詳細は熊倉『民芸の発見』pp.62—63を参照。

そのころの仏教史の知識では無理からぬことであるが、柳宗悦は木喰行道を徳行においても、学識においても、すぐれた高僧とおもいこみ、その生涯の行動は、すべて慈悲忍辱の仏教精神からでたものとかがえた。誤字宛字だらけの文字も梵字も、ものにこだわらぬ悟の境涯と解した。これは柳宗悦のいっていた高僧の既成概念のなかに、木喰行道をはめこんでしまっているのである。またふかい信仰なしにはこのように簡素で、自由な作品はつくれる筈がないとし、「古典からの離脱は、古典への尊重を経て生れたものである。<sup>73)</sup>」とまで強調する。しかしまことに皮肉ではあるが、信仰とは関係なしに、技巧が稚拙であれば簡素たらざるをえないし、古典に無智であれば、はじめから古典を離脱して自由でありうるのである。

柳宗悦の木喰観の大きな欠陥は歴史的考察がまったく欠如していたことである。これはディレッタンティズムの主観主義によるのであって、仏像や壺をとりあげて、ためつすがめつ「こりゃあいい！ こりゃあいい！」を連発するあの姿勢である。彼の時代の彼の階級にぞくする人たちは、その美の客観性を歴史的に追求するなどという冷酷な、こちたきわざは美神への冒瀆であり、自分たちの美的直観力への不信行為であった。<sup>74)</sup>

「柳宗悦は木喰を偶像として、その成長と発展をみとめない。これは彼の時代の時代思潮でもあるが、作品の年代的排列をこころみなかったことと、北海道の初期の不完全な作品を見なかったことにもよるであろう。<sup>75)</sup>」

「(柳は)「伝統的見方に沈む者には、彼の作が粗悪なものとしてのみ映るであろう。さもなくば高々奇異な作だとして感じるに過ぎぬ。併しそれは見る者の心の乏しさによるのである。彼の作に乏しさがあるからではない。<sup>76)</sup>」と弁護する。

いくら芸術の鑑賞は個人の勝手だといってもこれでは困る。駄作はだれが見ても駄作であり、傑作はだれが見ても傑作でなければならぬ。……柳宗悦は習

73) 春秋社版選集第9巻「木喰上人」p.116

74) 五来前掲書、pp.24-25

75) 同書、p.25

76) 春秋社版選集第9巻「木喰上人」p.118

1984年12月 八田善穂：柳 宗悦の民芸論（Ⅱ）

作時代の北海道での作品を見なかったばかりでなく、初期の栃木県栃窪<sup>とちくぼ</sup>77)や佐渡での作品まで、なんでもかでも依怙地になって強引に傑作のなかにおしこんでゆく。これではほんとうの、客観的な木喰芸術の評価にはならない。78)」

「現代の庶民はありがたい高僧伝よりも「青の洞門79)」や宮沢賢治80)の詩に宗教を感じず。天平仏の威厳よりも、微笑仏の人間味に魅力を感じず。しかるに柳宗悦ほどの人が、なぜ微笑仏に人間性を直観できなかつたのであろうか。81)」

五来氏のこの著書が出版された翌年、東京民芸協会82)の機関誌「民芸手帖」106号（昭和42年3月刊）には、この書物に関する記事が6篇掲載された。そのうちの1つ、寿岳文章「木喰行道への新しいアプローチ」において寿岳氏は、五来氏の「大正末年の木喰ブームは柳宗悦の民芸運動から出発した」という記述に対し、事実は逆であることを指摘している83)。また寿岳氏は、五来氏が「柳宗悦ほどの人が、なぜ微笑仏に人間性を直観できなかつたのであろうか」とするのに対し、柳は木喰仏に大いに人間性を直観していたことを指摘している84)。事実、柳は「彼の作は路傍に立つ祠に置かれねばならぬ。それは私達に話しかける。私達を離れるにしては、余りに人間的である。85)」と述べている。

さらに岡村吉右衛門「興味のある木喰仏の研究」においては、五来氏の「柳宗悦の木喰観の大きな欠陥は歴史的考察がまったく欠如していたこと」であり、「作品の年代的配列をこころみなかつたこと」であるとす所説に対し、柳の手になる「木喰上人略伝86)」や「木喰五行明満上人年譜87)」の存在が指摘され

---

77) 鹿沼市栃窪

78) 五来前掲書，p.29

79) 菊池寛（1888—1948）の小説「思讐の彼方に」で有名。

80) 1896（明治29）—1933（昭和8）

81) 五来前掲書，p.99

82) 東京都中央区銀座「たくみ」内

83) 「民芸手帖」106号，p.9

84) 同上

85) 「故郷丸畑に於ける上人の彫刻」春秋社版選集第9巻「木喰上人」p.244

86) 「木喰上人の研究」特別号所載（大正14年4月），筑摩書房版全集第7巻「木喰五行上人」，春秋社版選集第9巻「木喰上人」所収。

87) 同上

ている<sup>88)</sup>。

しかし、それにもまして、柳が直観を重視したことは事実である。そして、むしろここにこそ柳の真面目がある。彼はいう。

「どうして他人が今まで認めないものを認めるに至ったのか。匿れてゐるものをどうして見つけ出すのか。この問いへの答へは実に簡単なのである。別に秘訣などは少しもない。只物をぢかに見さへすれば、それでよいのである。それ以外に何もものもない。この何もものもないといふことが、秘訣と云へば秘訣である。

物をぢかに見るといふのは、見る眼と見られる物との間に何ものをも介在させないといふ意味である。知識だとか文献だとか評判だとか主義だとか、そんなものを一切二の次に廻して、ぢかに物を見ればよいのである。残念にも多くの人々は物を見る時、大概是概念を先に働かせて了ふ。併しそれだと、その概念に合ふもの以外は見えなくなって了ふ。概念は謂はば色眼鏡のやうなもので、ぢかには物を映さない。最初から一定の枠を作って、その中に物を嵌めて眺めて了ふ。うまく嵌まるとそれで分つたと思ふし、嵌まらないと棄てて了ふ。それ故、物をぢかに見るのではなく、概念に包んだものを見てゐるに過ぎなくなる。それでは物の真の姿は現れて来ない。<sup>89)</sup>」

「恐らくは自分に眼力がないと、何かに便らねば不安なのであらう。持出す概念は謂はば便り所なのである。文献とか在銘とか評判とかが凡て大切な拠り所になってくる。それ故えに当嵌まらぬと不安なのである。うまく当嵌まると安心して購ひ、進んでは自慢さへする。併しそれ等は凡て一種の物差に過ぎない。なぜ自身で無手で物を見ないのであらうか。物を見るには物差など持出さずともよい。持出さぬ方がよい。持出せば物差で計れるもの以外は見えなくなって了ふ。この世にはそんな目盛や長さで計りきれないものが沢山ある。一定の物差の如きは、見方を縛って不自由なものにさせるに過ぎぬ。真に美しいもの

88) 「民芸手帖」106号, p.21

89) 「民芸館の蒐集」(昭和18年記)筑摩書房版全集第16巻「日本民藝館」,春秋社版私版本柳宗悦集第4巻「蒐集物語」,筑摩書房刊近代日本思想大系24「柳宗悦集」(昭和50年)所収,春秋社版私版本柳宗悦集第4巻「蒐集物語」(昭和49年)p.281

は、寧ろ割り切れないものであらう。物差で計り切れる美しさは、高が知れてるよう。少なくとも美しさの自由は、計量を越える。<sup>90)</sup>

「ぢかに物を見ることが直観である。<sup>91)</sup>」

「直観を「新鮮な印象」と説いてもよい。純粹に直観を働かさうとするなら、物から新鮮な印象を受け得る位置に自分を置けばよい。それ故印象を曇らせたり、又曖昧にさせたりするやうな立場を取ってはいけない。概念を先に働かすのが大きな邪魔となるのは、之が印象を凝固させるからである。受取るものは印象ではなくして寧ろ知識になって了ふ。知識で受取ると、物はぢかにその姿を見せてくれない。知識はどこまでも間接的である。見ることと知ることとはいたく違ふ。<sup>92)</sup>」

「直観を一種の主観に過ぎぬやうに評する人もあるが、主客以前の働きが直観である。それは主客未生の境地である。主観的であったり独断的であったりするなら、それは寧ろ直観が衰へ、概念の迷ひが蔓延<sup>はびこ</sup>る故に生じる誤謬に過ぎない。独断なら既に直観ではない。同じやうに主観に対する客観なら、まだ確實ではない。主客を越えるに及んで、始めて認識が的確になる。かかる認識は直観をおいてはない。

私達は何も概念の存在意義を否定しようといふのではない。只、物の価値判断には、常に直観を基礎にせよと云ふのである。さうしてかかる判断を後から概念で整理すればよいと説くのである。始めに直観、次に概念、この順序を乱してはならない。さもないと物の本質を見ぬくことは遂に出来ない。<sup>93)</sup>」

柳の活動は、終始この信念に貫かれていた。それゆえ、五来氏の批判がある程度妥当であるとしても、それまで誰にも注目されることのなかった木喰仏について、それを最初に発見し、短期間のうちに膨大な調査を成し遂げた柳の功績は、充分に評価されるべきである。これは後の民芸についてもまったく同様である。

---

90) 同書, pp.282—283

91) 同書, p.283

92) 同書, p.285

93) 同書, pp.286—287

陶芸、書画、篆刻、料理など、多方面で活躍した北大路魯山人<sup>94)</sup>は、昭和5年から6年にかけて、自分の雑誌「星岡」の誌上で、柳の民芸論を嘲弄したという<sup>95)</sup>。たとえば次のようである。

「扱君が否定する処の上手物なる物を、君がどれ位知って居るかが問題だが、君の云ふ上手物は駄作の上手物であって、名作の上手物を未だ凝視したことが無いらしい。見たことはあっても、終に解らず仕舞ひで、下手に走ったんであらう。例へば絵画にしても、そりゃ四条や狩野の駄作画から見れば、傑作の大津絵が優るのは云ふまでもない。それを見つけると君の性分で一途に惚れこんで仕舞ふ。矢も楯も堪らなくなって一概に大津絵で無くば夜も明けん始末になる。<sup>96)</sup>」

美術評論家の白崎氏は次のようにいう。

「茶道の大名物の中心をなすものは、東山御物であり、東山御物の首位に在る陶器は青磁や曜変・油滴などの天目茶盃である。これらも当初から明確に茶盃として作られたものであった。柳が終始、大名物を天正以後に重んじられた井戸茶盃に代表させていたのも、甚だ当を得ない。

彼の主張は、農民の用いていた信楽や伊賀の種壺を、紹鷗や利休が見立てて、水指や花生として用いたという類の事実には、妥当するであろう。彼は、かぎられた範囲で妥当することを、全称命題的に拡大し、これをもとに観念的な論理の操作によって、非現実的な民芸論を現実的に体系づけたのである。

この作業において、柳宗悦は、まことに偉大であった。<sup>97)</sup>」

「柳の民芸論は、当初朝鮮のいわゆる雑器の讚美に発したのである。従来見すてられていた下手物に対して一種の光をあてたというかぎりでは、功績がなかったとはいえぬが、そもそも民芸派の朝鮮の雑器の「美」とは、どの程度のものであったろうか。<sup>98)</sup>」

94) 1883(明治16)－1959(昭和34)

95) 白崎秀雄『北大路魯山人』文藝春秋社、1971年

96) 文春文庫版(1975年)(上)p.226

97) 同書、p.233

98) 同書、p.234

「（「高麗青磁水禽文鉢」は）一見して、高麗末期のものであるが、高麗の象嵌青磁としては、釉色も形姿も鈍い凡作にすぎない。しかも、高麗の象嵌青磁などというものは、宮廷もしくは貴族の用品であって、民衆などとはまったく何の関係もない。これは、貴族用品つまり上手物の、下作なのである。<sup>99)</sup>」

しかし柳は、「上手物」の美を否定したことは1度もないはずである。柳が主張したのは、「上手物」の他にも、民衆の雑器の中に見るべきものが多いということにすぎない。柳以前には、誰一人としてそのことに気づいた者がいなかった。それゆえにこそ、柳は自分の発見したこの新しい領域の美について、40年間にもわたって説き続けたのであろう。

鶴見俊輔氏は次のように述べている。

「看板書きから、腕一つで天下の名士となった北大路魯山人には、有名になりたくないとか、金がほしくないというような人は、偽善者であり才能うすきものであるという不動の信念があり、その立場から見ると柳はただの坊ちゃん育ちのくだらぬ人に見えた。<sup>100)</sup>」

「自分が悪口を言われたからというだけでなく、魯山人のような型の人と柳はあうわけがない。……一口に言って、「世間師のタイプ」と柳はあわなかった。柳は、学歴などにこだわらず、周囲に学閥をつくらず、眼のきく人を重んじた。柳自身が勉強したにもかかわらず、大学教授もしたことがあるにもかかわらず、まず見ることから知ることへというすじを失わなかったという。<sup>101)</sup>」

魯山人の人物像は、白崎氏の前記作品に克明に描き出されている。

## （2）民芸学の理念

柳は昭和16年に発表した「民芸学と民俗学<sup>102)</sup>」という論文で、次のようにいう。

---

99) 同上

100) 鶴見俊輔『柳宗悦』平凡社 1976年、p.204

101) 同書、p.205

102) 「工芸」104号（昭和16年6月）所載、筑摩書房版全集第9巻「工芸文化」、講談社刊日本民俗文化大系6「柳宗悦」、柳宗悦『工芸』創元社、昭和16年所収。

「仮りに客があって彼に一つの抹茶碗を見せたとする。客の態度には二つの種類があることがすぐ気附かれるであらう。「之は何と呼ぶ茶碗ですか。どこの焼物ですか。何時代のものですか、何と云ふ作者が作ったのですか」、先づかう云ふ風な問ひを發する。茶碗そのものよりも茶碗に関する事柄が知りたいのである。所がもう一つの型はそんな事を尋ねるよりも、「素敵な茶碗だ」とか「大した味だ」とか感嘆が先に出てくる。云はば茶碗の美的価値そのものが心を引きつけるので、茶碗に関する事柄は後廻しにされる。一方は「こと」の世界に凡てを導き入れて判断する。一方は直接「もの」そのものを見つめるので、すぐにそれが有つ本質的価値即ち美しさを追求する。前者は間接的な道であり、後者は直接的な道だとも云へる。一方は外から観察し、一方は内から洞察する。それ故「こと」は主として抽象的な無形の世界に属し、「もの」は主として具象的な有形の世界に属する。<sup>103)</sup>」

「私は更に又「こと」と「もの」との差異を、「知る」道と、「観る」道との対比から説明することが出来よう。……凡て学と云はれるからには、知を働かすのは当然であるが、民芸学は他の価値学の場合と同じく、「知る」力だけで此の学問を築き上げることは出来ない。之にどうしても「観る」力が伴はないと空虚なものに陥って了ふ。ここで「観る」と云ふのは只生理的な視力による意味ではなく、ものそのものの本質を内観する力を云ふのである。哲学では直観とか体験とか云ふ言葉で之を言ひ現はすが、兎も角此の力が働かないと価値界に触れてゆくことが出来ない。だから民芸学では「観る」力が「知る」力の基礎とならなければならない。先づ観ることから知ることへと進まねばならない。なぜなら観ることなくしては、「もの」の本質に交ることが出来ないからである。「知る」だけでは価値学は成立しない。観る力が伴ないと結局嘘の学問に終るであらう。<sup>104)</sup>」

「民芸学は広い意味で哲学の部門に属する。それ故概念に先んずる体験や直観の力を疎んずるわけにゆかない。知る道に立つ学問と、之に観る道が加はる

103) 柳宗悦『工芸』創元社、昭和16年 pp.145—146

104) 同書、pp.150—151

学問とは、自から性質が別れてくる。<sup>105)</sup>

「「知る」と云ふことは「分別」と云ふ言葉がよく示す通り、分析する働きである。凡ての知識は分析に基礎を置くのである。併し理解への道程は分析の一路だけではない。……もう一つ「観る」と云ふ働きが備はってゐる。之は分析ではなくして、総合の道である。哲学者は之を「概念以前」の働きとも呼んだが、直観は全体的なるものの把握とも云へる。価値認識にはかかる統体的な働きが必要である。分析だけでは、価値の領域に入ることが出来ない。<sup>106)</sup>

「民芸学が明らかにしようとする美の問題は、当然二つの大きな性質を包含する。第一は美と民衆との関係である。第二は美と実用性との結合である。是等の問題は在来の美学が殆ど等閑視した所であって、美の貴族性や、美の超実用性こそは、名誉ある高貴な題材だと考へられて来たのである。だから民芸学は在来の美学に対する大きな反抗であり、革命であり、又修正である。<sup>107)</sup>

「民芸学が明らかにしようとする所は何か。要するに生活に即した美の深い意義をせんめい闡明にすることが大きな使命である。かくして此の学問は民芸が最も顕著な国民性の表現に他ならぬことを示すであらう。民芸の貧弱な国民は、国民生活自体の貧弱性を現はすに外ならぬ。何故なら民芸程、国民生活の直接的な現実な反映はないからである。<sup>108)</sup>

「民芸学は未来の問題に対して無関心であることは出来ない。如何にして正しい民芸を未来にも振興せしむ可きかの問題にも当面せねばならぬ。民芸学が美の法則を究める所以は、其の法則が一つの規範として未来にも役立つ可きことを明らかにするにある。<sup>109)</sup>

「民芸学は将来に於ける地方産業に就ても、冷淡であるわけにゆかない。もとより学問である限り、技術とか創作とか経営とかと混同さる可きでないが、地方の民芸運動に対し、基礎的理論を樹立する任務を背負はねばならぬ。かか

---

105) 同書, p.152

106) 同書, p.153

107) 同書, p.156

108) 同書, p.158

109) 同書, p.159

る意味で未来の問題をはらまない民芸学は真の民芸学ではない。私達は何より未来に健全なる美の王国を建設する使命があるのである。人類の意向は只過去だけに認識を止めることに満足しないであらう。未来を正しく創る準備こそ凡ての価値学が背負ふ任務である。<sup>110)</sup>」

「価値学としての民芸学は、記述学としての民俗学より、更に基礎的なものと云へる。それは科学より哲学の方が一層本質的の学問だと云ふのと同じである。科学が深まる時は、哲学に触れる。哲学に深まらない科学は科学に徹したものは云へない。それは何も分野を破ると云ふ意味ではなく、より深い基礎を有ち、より高い視野を得る所以である。<sup>111)</sup>」

「将来の哲学は科学を無視することはできない。同時に科学は哲学に無関心であってはならない。一つの全き学となる為には、両者の総合がなければならない。<sup>112)</sup>」

最後の部分は純然たる学問論である。そしてここで述べられていることについては、これまで多くの人々により、繰り返して指摘されている。しかし柳の場合には、われわれの生活に最も身近な日用品（雑器）をめぐる問題から出発した点に大きな特徴がある。

彼は日常われわれが何気なく使う品々の中に最も健康な美を見出した。それまで美の問題は美術の領域でのみ論じられ、日用品について論じられることはなかった。柳ははじめてこの点に着目し、民芸論を構築した。そしてそれを哲学の一分野として位置づけた。この思索の過程は真に独創的なものである。岡村吉右衛門氏によれば、「(当時)世界中で、誰一人そのようなことを云い出す者はいなかった。それが日本人によって世界で最初になされたことは、日本人として誇りに思っただけ<sup>113)</sup>」ほどのことである。

「民芸学と民俗学」は冒頭に挙げた「陶磁器の美」の発表から20年後の文章である。そしてこの期間は、40年に及ぶ柳の民芸に関する思索の前半期に当る。

---

110) 同書, pp.161-162

111) 同書, pp.162-163

112) 同書, p.163

113) 「民芸の伝統と価値」『太陽』1969年8月号(特集・日本の民芸)平凡社, p.59

この間に一貫して説かれていることは、「見る」ことから「知る」ことへということであり、「直観」の重視であった。

そして、これまでに見たような、「直観」にもとづく柳の初期の活動と思索は、後期に見られる「仏教美学」の形成に対して、かなり豊富な材料を提供したように思われる。

〔参考〕現在山口県内で確認されている木喰仏の、主な所在寺院は次の通りである。

阿武郡福栄村福井榎屋、願行寺（浄土宗）

阿武郡福栄村堂ヶ迫、宝宗寺（曹洞宗）

阿武郡福栄村紫福、信盛寺（浄土宗）

萩市北古萩町、梅蔵院（浄土宗）

美祿郡美東町大田、地蔵院（臨済宗）

山口市下堅小路町、法界寺（浄土宗）

山口市東山、性乾院（浄土宗）

山口市白石、普門寺（臨済宗）

山口市水の上町、洞春寺（臨済宗）

宇部市二俣瀬区木田、極楽寺（浄土宗）

宇部市山門、松月院（浄土宗）

防府市大字奈美、普門寺（曹洞宗）

防府市宮市新町、定念寺（浄土宗）

防府市牟礼上坂本、阿弥陀寺（華嚴宗）

防府市牟礼岩畑、極楽寺（曹洞宗）

玖珂郡大畠町遠崎、長命寺（浄土宗）

なお、木喰仏は全国では新潟県に最も多く、山梨県、静岡県、山口県などがこれに次ぐ。